扇の的——「平家物語」から(3)

平家は源氏の行為(こうい)を残念に思ったのか、水ぎわに上がり、「攻め寄(よ)せてみよ。」と声をあげた。義経(よしつね)が八十余騎(き)で攻め入ると、平家は舟(ふね)に退く。源氏は馬の腹が水につかるほど海に入り、攻め戦った。このときどうしたことか、義経の弓が引っ掛(か)けられ、落とされてしまう。義経は、味方が「ただお捨てなされ。」と申し上げるのも聞かず、弓を取って笑って帰ってきた。老臣たちは、「残念なことです。たとえどんなに高価な弓であるとしても、どうしてお命に替(か)えられましょうか。」と言う。これに義経が答える。

①「弓の惜(を)(オ)しさに取らばこそ。

弓が惜しくて取るのであればそうだが（そうではない）。

義経が弓といはば(ワ)、二人(にん)してもはり、もしは三人してもはり、

義経の弓といえば、二人がかりで張り、または三人がかりで張る、

②叔父(をぢ)(オジ)の※為朝(ためとも)が弓のやう(ヨウ)ならば、わざとも落として取らすべし。

叔父の為朝の弓のようだというならば、わざとでも落として（敵に）取らせよう。

尫弱(わうじやく)(オウジャク)たる弓を敵(かたき)の取り持つ(モッ)て、

弱々しい弓を敵が取って、

『これこそ源氏の大将※九郎(くらう)(ロウ)義経が弓よ。』

なんとこれが源氏の大将・九郎義経の弓だよ。

とて、嘲哢(てうろう)せんずるが口(くち)惜(を)(オ)しければ、命にかへ(エ)て取るぞかし。」

と言って、嘲笑するだろうというのが残念だったから、命に替えても取ったのだよ。

と宣(のたま)へ(エ)ば、③みな人これを感じける。

とおっしゃると、全ての人がこれを聞き感じ入った。

※為朝…源為朝。義経の叔父にあたる。勇猛な武将で強弓の使い手として知られたが、保元の乱に破れ、流罪となった。

九郎…義経は父・義朝の九男で、通称を九郎という。その官位から九郎判官ともよばれる。

源(みなもとの)為義(ためよし)
- 義朝(よしとも)
  - 頼朝(よりとも)
  - 範頼(のりより)
  - 義経(よしつね)
- 義賢(よしかた)
  - 義仲(よしなか)
- 為朝(ためとも)

確認テスト　本文を読んで、問いに答えなさい。

(1) 次の言葉を現代仮名遣いに直し、**ひらがな**で答えなさい。

てうろう　〔　　　〕

(2) ——線①「弓の惜しさに取らばこそ」とあるが、ここで義経が言おうとしている内容となるように、（　　）に入るものを選びなさい。

弓が惜しくて取るならば老臣たちの言うように非難もされようが、（　　　　）。

ア　弓が惜しくて取ったのではない
イ　弓はかけがえのない大切なものだ
ウ　弓を取り返したので非難されることではない

〔　　〕

(3) ——線②「叔父の為朝が弓」はどのような弓として述べられているか、適当なものを選びなさい。

ア　強い弓　　イ　弱い弓　　ウ　高価な弓

〔　　〕

(4) ——線③「みな人これを感じける」とあるが、なぜ感じ入っているのか。適当なものを選びなさい。

ア　義経が、本当は弓をわざと落として敵に取らせようとしていたのだと知ったから。
イ　義経が弓を敵に奪われてしまい、嘲笑されて残念に思っているのだと知ったから。
ウ　義経が源氏や自身の恥とならないように命がけで弓を取りに行ったのだと知ったから。

〔　　〕

(5) 本文の内容に合うものを選びなさい。

ア　義経の弓は二人や三人で張る弓だった。
イ　義経の弓は弱々しい弓だった。
ウ　義経の弓は為朝の弓のようだった。
エ　義経の弓は敵に奪われてしまった。

〔　　〕